

〈三言〉における悲劇的作品の考察

中里見, 敬
東北大学大学院文学研究科 : 中国文学

<https://hdl.handle.net/2324/26655>

出版情報 : 集刊東洋学. 62, pp.93-109, 1989-11. 中国文史哲研究会
バージョン :
権利関係 :



〈三言〉における悲劇的作品の考察

中里見

敬

序 問題の設定

〈三言〉百二十編を通読した時、我々は自殺する女性を描いた作品にとりわけ強い印象を受けるだろう。

ところが、それらの作品は、例えば「杜十娘怒沈百宝箱」(『警世通言』三十二)が「思想内容の十分に深刻な愛情悲劇」として高く評価される一方、「蔡瑞虹忍辱報仇」(『醒世恒言』三十六)は「封建礼教のために讃歌を奏でた」として厳しく批判されるように、分裂した評価を与えられている。⁽¹⁾そこで本稿では、先の二編に「王嬌鸞百年長恨」(『警世通言』三十四)、「趙太祖千里送京娘」(『警世通言』二十一)を加えた、ともに自殺する女性を扱った四編の悲劇的作品を、どのようにとらえることができるかという問題を考えたいと思う。

問題の考察にあたっては、物語の団円と教化主義的道德

性という、話本の二つの顕著な特徴を取り上げる。しかし話本を特徴づけるこれらの目印を、作品や作者の思想と結びつけるのではなく、読者が話本を読む際の期待の地平、換言すれば安定した読解に至るための作者と読者の間の約束だと考える。なぜなら話本を団円や道德によって完結させることは、語り手が物語を破綻させることなく語るために物語を調和的解決に導こうとし、また読者が物語を秩序ある統一体として理解しようとする欲求を満たすことになるからである。すなわち本稿は、話本の特徴として指摘される団円および道德性を、語り手および読者という観点から考察することを目指す。⁽²⁾

まず第一章では話本を団円に至る予定調和の世界として理解する。第二章では話本を道德的一貫性による統一的構造として理解する。その過程で、団円と道德の調和した作品に対して、その二つが矛盾をきたしたものとして四編の

悲劇的作品の特殊性を明らかにする。第三章では語り手の示す統一的解釈が内包する問題を指摘し、より開かれた読解の可能性を探る。

第一章 話本は団円に至る

例えば〈三言〉の中で最も長い作品の一つ「玉堂春落難逢夫」(『警世通言』二十四)⁽³⁾には、冒頭に詩が掲げられており、物語の展開を読者に示している。

公子初年柳陌遊、昔 公子は色街に遊び、

玉堂一見便綢繆。玉堂を一目見ただけで惚れてしまう。

黄金数万皆消費、(公子は)数万の財産をすべて使い尽

くし、

紅粉双眸枉淚流。(玉堂の)美しい顔にいたずらに涙が流れる。

財貨拐、僕駒休、財貨はだまし取られ、下僕も馬もい

くなり、

犯法洪同獄内囚。罪を犯し洪同県(の)監獄の囚人となる。

按臨驄馬冤愆脱、巡按の役人が冤罪を晴らしてくれ、

百歲姻縁到白頭。末永き婚姻は白髪になるまで続く。

「百歳の姻縁 白頭に到る」という団円を暗示する情報を得たうえで、読者はこの物語を読み始めるのである。そして「のち王景隆(公子)は、官職は都御史に至り、妻妾ともに

子をもうけ、今に至るまで子孫繁栄している」という結末に至ったとき、読者の団円の期待は満たされるのである。

1・1 「売油郎独占花魁」(『醒世恒言』三)

「売油郎独占花魁」を例に、話本の団円を具体的に見てみる。あらずじは分節化し、以下の説明に便利のように記号を付した。

〔あらずじ〕

1 瑤琴は父母と離れ離れになり、王九媽の女郎屋に売られる。

2 瑤琴は無理矢理水揚げさせられ、劉四媽になだめられ、花魁として有名になる。

3 秦重は父と別れて、朱十郎の油屋で働く。

4 秦重は朱十郎に追い出され、油のかつぎ売りをする。

5 秦重は花魁に惚れるが、会うためには大金が必要と知り、せっせと金を貯める。

6 ようやくある晩花魁と一夜を共にするが、泥酔した花魁の介抱だけで終わる。

7 秦重は朱十郎の店に戻る。

8 花魁の父母が秦重の店に住み込みで雇われる。

9 秦重は呉八公子に乱暴された花魁を救う。

10 花魁は劉四媽の助力で落籍され、秦重と結婚する。

B⁺

B⁻

Y⁻

A⁻

X⁻

11 花魁は父母と団円。

12 秦重も父と団円。

$Y^+ X^+ A^+$

時は北宋末、開封陥落の混乱の中で、莘瑤琴は両親とはぐれて、臨安に連れて来られ女郎屋に売られる。これが瑤琴の困難（ X^- ）である。一方秦重も同じく開封から避難してきたのだが、父は彼を油屋に売って、自分は上天竺寺の寺男になっている。ここでも親子の別離という困難（ Y^- ）が設定されている。この二組の親子は、物語の結末まででたく再会し、困難は解決される（ X^+, Y^+ ）。このように全体を支配する困難が解決されることによって、物語は完結するのである（ $X^-, Y^- \rightarrow X^+, Y^+$ ）。

団円に至る過程をたどってみよう。戦乱の中での親子の生き別れという大きな困難の次には、人為的な困難が主人公たちに課せられる。瑤琴は女郎屋で王九媽にだまされて水揚げさせられ、以後いつか氣に入った人に落籍されることを期待しつつける（ A^- ）。一方秦重も同じ店の番頭に悪口を言われ、それを信じた主人・朱十郎によって追い出される。これから秦重は油をかかえて街を売り歩くという苦勞が始まる（ B^- ）。しかしその行商の途中で秦重は花魁と出会うことになる。やがて秦重は、朱十郎の誤解が解けて、油屋を継ぐことになる（ B^+ ）。そして花魁も秦重に二回優しく

されて彼の人柄を知り、劉四媽の援助によって落籍されて結婚する（ A^+ ）。このように内部に仕掛けられた緊張も、一つ一つ解かれる（ $A^-, B^- \rightarrow A^+, B^+$ ）。さらに花魁の両親が秦重の油屋に雇われるという伏線があらかじめ敷かれており、二人の結婚と同時に親子団円が導かれる。これらのプロットは作品の内部に起伏と緊張をもたらし、物語の細部を形成しつつ、物語を団円へと導くのである。

この作品からわかるように、作品全体を支配するのは親子の別離―再会というような、極めてありふれた「困難―解決」の構図である。それに対して、団円に至る過程は、個々の作品による趣向を凝らした世界が展開される。この作品では、臨安一の妓女としない油売りとの恋の成り行きに、最大の関心があることは言うまでもない。また同時に花魁の女郎屋に売られてから落籍されるまでの詳しい描写は、妓女の一代記となっている。さらに男性秦重の側から見ると全体として遊里での遊び方指南という体裁になっている。作品の主眼は団円すること自体にあるのではなく、団円に至る過程の様々な趣向にあると言つてよからう。

大多数の話本は団円の結末を迎える。その団円とは、別離―再会、科挙落第―及第出世のようなきわめてありふれたものであり、物語に安定した調和的構造を与えている。それが個々の作品内部の個性的な趣向を保証する外枠の役

割を担っているのである。

1・2 「范鰵児双鏡重円」(『警世通言』十二)

次に「范鰵児双鏡重円」とその来源『説郛』弓十八所引の『摭青雜説』の記事とを比較しながら、話本において団円に至る過程に手が加えられていることを見る。

(「あらすじ」)

1 南宋の建炎年間、飢饉に乗じて建州では賊の范汝為が勢力を誇っている。

2 呂忠翊は福州赴任の途中で、娘・順哥を范汝為の軍に奪われる。

3 范汝為の甥の范希周は優しくて、泳ぎがうまく「范鰵児」とあだ名されている。

4 范希周は順哥を娶ることになり、先祖伝来の「鴛鴦宝鏡」を順哥に贈る。

5 官軍の攻勢にあい、順哥は自殺しようとするがなだめられ、范希周と順哥は「鴛鴦宝鏡」を一枚ずつ持って別れる。

6 順哥は自殺しようとしていたところを父に助けられる。

7 呂忠翊は娘に再婚をすすめるが、順哥はかたく拒む。

8 数年後、封州鎮守の呂忠翊のところに一人の使いが

来て、順哥は彼を夫ではないかと思うが、父は一笑に付す。

9 半年後その使いがまた来たので、順哥は父に彼のあだ名と鏡のことを聞くように頼む。

10 果たして彼は「范鰵児」で、鏡もピッタリ合い、夫婦は団円する。

この作品は、親子の別離(X⁻)、夫婦の別離(Y⁻)という困難が解決され、団円(X⁺, Y⁺)を迎えるというものである。そのことは、来源とまったく一致している。

では団円に至る過程はどうなっているだろうか。話本では、夫婦離別に際して、二つの目印が与えられている。すなわち泳ぎは得意だけれども臆病者という意味でつけられた「范鰵児」というあだ名(A)と一枚ずつの「鴛鴦宝鏡」(B)である。これらのあらかじめ用意された目印を確認する(A⁺, B⁺)ことによって、二人は再会を果たす。ところが来源には「范鰵児」というあだ名と「鴛鴦宝鏡」は出てこない。夫婦再会の場面は、娘が父に頼んで使者の出身地を尋ねたことから、彼が告白するかたちで展開している。来源と話本の文章を対照してみると、話本は『摭青雜説』にかなり忠実に拠りつつ、「鴛鴦宝鏡」を独自に挿入していることがよくわかる。話本は内部に二つの目印という趣向を新たに凝らすことによって、偶然による夫婦再会を小説

的必然に転化させているのである。

さらに物語の団円を支えているいまひとつの要素に、順哥の貞節（*）があることを忘れてはならない。彼女は官軍に攻め込まれたとき、「忠臣は二君に事えず、烈女は二夫を更えず」と言つて刀を抜くが、夫に諭されて、再会の日まで再嫁しないことを誓つて「鴛鴦宝鏡」を一枚ずつ手にする。その後いよいよ頭目の范汝為が死に、夫も生き延びられないと思つた順哥は、首を吊つたところをちやうど父に発見され救われる。そして順哥は父母の再嫁のすすめを固く拒み通す。このような彼女の貞節が、結末における夫との団円を保証しているのだ。この部分は話本と来源とに共通している。

「范鯁児双鏡重円」では、順哥に、父との別離（X）、夫との別離（Y）という、二つの困難が課せられ、それらが解消されることによって団円の結末を迎えていた。困難解消の契機は、夫のあだ名（A）・小道具（B）という目印と、登場人物の道徳性（*）であり、特に前者は話本化されるにあたって付加されたものであった。

この作品においても、我々は物語の団円という予定調和の世界を確認することができた。登場人物の道徳性を、ここでは物語を団円に導く要素としてとらえたが、次章で再びより詳しく検討する。

1・3 戯曲における団円の確立

では団円が顕著な約束として確立するのはいつごろのことであろうか。団円が優越していく過程を、戯曲を例に見ていく。

徐渭の『南詞叙録』⁽⁵⁾によれば、南戯の起源を、永嘉すなわち温州の雜劇に求めている。

南戯は宋の光宗朝に始まる。永嘉人作所の趙貞女・王魁二種、實に之が首たり。⁽⁶⁾

ここに述べられている「趙貞女」「王魁」は同書「宋元旧篇」の項にそれぞれ次のように注されている。

趙貞女蔡二郎：（注）即ち舊し伯喈 親を棄て婦に背きて、暴雷の為に震死せらる。里俗の妄作なり。實に戯文の首たり。

王魁負桂英：（注）王魁、名は俊民、狀元を以て及第す。亦た里俗の妄作なり。⁽⁷⁾

「趙貞女」は蔡邕が親を棄て妻に背き、雷に打たれて死ぬというものである。「王魁」は、南宋・曾慥の『類説』⁽⁸⁾卷三十四所引「摭遺」の「王魁伝」によると次のような話である。

王魁は旅先で桂英と知り合い、深い仲になる。科擧受験に出掛けるにあたって、二人は将来を誓いあう。王魁は及第すると桂英を遠ざけ、桂英は自殺する。王魁は桂英の霊にとりつかれ、やがて死んだ。

「趙貞女」と「王魁」は、ともに背徳の男がその報いとして死ぬという結末である。ここでは物語は、素朴な因果応報の原理に従っている。話本において顕著だった安定的な団円によって物語を閉じる構造は、いまだ確立していない。この二つの作品は元末から明代になると新たな改変が加えられる。まず「趙貞女」は高明により『琵琶記』に作り変えられる。『琵琶記』では蔡邕が親を棄て糟糠の妻に背いて高官の娘を娶ったことに、合理的な説明がなされる。つまり、科挙に合格すると高官の言いつけに逆らうわけにはいかず、やむをえずその娘を娶ったのである。こうして結末は一夫二婦の団円で結ばれる。

一方「王魁」も、楊文奎によって雜劇「王魁不負心」が作られ、王玉峰によって伝奇「焚香記」が作られている。「焚香記」は毛晋の『六十種曲』に収められているが、『曲海総目提要』巻十四は次のように改変のことを述べている。桂英生を重ねて魁と与に偕老す。則ち作者然せざるを得ざるなり。此れ等の事後来頗る多し。⁽¹⁰⁾

このように明代になると、物語の円満な完結こそが優先され、主人公の道徳性には何らかの合理的な処理がほどこされるようになる。例えば王国維が「明以後、伝奇無非喜劇、而元則有悲劇在其中」（『宋元戲曲考』12）⁽¹¹⁾というように、明以後の戯曲は、団円であることが第一義的に要請さ

れるようになった。現在我々が見ることのできる話本は、すべて明代以降の編纂であって、そのために物語団円の構造がかくも強固に保たれていたのである。団円の優越は明代の戯曲・小説を通じて見られる特徴と考えられる。

本章では、話本は団円に至る「困難—解決」の過程として語られ、作品独自の趣向はその中で発揮されることを述べた。また戯曲の変遷をたどることによって、明代になって団円が強く要請されるようになったことを見た。明末の話本読者は、歴史的に確立していた物語団円の前提によって、安定した読解を享受することができたのである。

第二章 話本は道徳的である

本稿が直接の課題とする四編の作品は、女性の主人公が自殺するという結末のもので、前章で見たような団円に至ることがない。これらの作品は、団円に代わつてどのような秩序による読みを読者に促しているのだろうか。また読者はこれらの作品をどのように受け取るのだろうか。まず四編の作品を紹介する。⁽¹²⁾

「杜十娘怒沈百宝箱」（『警世通言』三十二）

大学生・李甲は妓女・杜十娘を身請けするが、父の怒りを恐れて商人に売り渡すことにする。それを知った杜十娘は、百宝箱とともに川へ身を投げる。

「王嬌鸞百年長恨」（『警世通言』三十四）

王嬌鸞は「羅帕」を落としたのがきっかけで、周廷章と恋仲になり、結婚の誓いを立てる。周廷章は父に従って呉江へ帰り、誓いに背いて他の女と結婚し、「羅帕」を送り返す。嬌鸞は呉江知県あてに「絶命詩」と「長恨歌」を書いて自殺し、廷章も打ち殺される。

「趙太祖千里送京娘」（『警世通言』二十一）

趙匡胤が青年時代、馬賊にさらわれてきた京娘を助け、途中の障害を乗り越えて、送り返した。京娘は愛を告白するが、匡胤は義侠心からしたことだと言い拒絶する。京娘は家族から匡胤との関係を疑われたため、自殺して潔白を証した。

「蔡瑞虹忍辱報仇」（『醒世恒言』三十六）

蔡瑞虹は賊に殺された父母の仇を討つために、賊の妻となっても生きながらえる。のち美人局をさせられるが、客の朱源の人格を確かめ、逃れて朱源の妾になり、子供もできる。しかし父の隠し子を見つけて蔡家を復興し、賊に仇討ちすると、目的を達したので自殺した。

2・1 団円の破綻

これらの作品に共通するのは、女性主人公の恋愛が成就せずに、自殺するという点である。「杜十娘」と「王嬌鸞」

には、「売油郎」で見たような全体を支配する「困難—解決」の外枠がない。「杜十娘」ではやりて婆のもちかける困難を解決して身請けを果たすが、李甲の心変わりから恋愛は破綻する。「王嬌鸞」では才子佳人の恋が、男性の裏切りによって破綻する。他の二編の場合、「趙太祖」では賊に監禁されていた京娘を趙匡胤が家に送り返すという、また

「蔡瑞虹」では賊に殺された両親の仇討ちという、いずれも「困難—解決」の外枠が設定されている。しかし、ともに女性が自殺して、円満な結末を迎えることができない。このように、前の二編では、恋愛の破綻と女性の自殺によって団円は破壊され、後の二編では外枠こそ完結しているものの（家へ無事送り返される、親の仇を討つ）、京娘の恋は実らず、蔡瑞虹も恩人との家庭生活を棄てて、ともに自殺という運命を選び、物語の円満な結末は失われている。これら四編の作品では、物語の団円という話本の最も基本的な調和的構造が破綻しているのである。団円に代わる何かの統一的原理を見出さない限り、読者は団円の欠如を補う安定した読解を手にすることができない⁽¹³⁾。

2・2 道徳原理による統一の回復

これらの作品に共通するのは女性主人公が自殺するという点である。しかし話本の語り手は彼女らの死を悲しむというよりは、むしろ自殺という行為を崇高な道徳的行為と

みなし、賛美さえするようである。例えば、貪欲な新安商人に売られることを拒んで自殺する杜十娘は「千古女俠」と評される。王嬌鸞は男の裏切りを知ると、絶命詩と長恨歌を作って自ら貞節を示す。また、京娘は宋の太祖となつた趙匡胤によつてのち貞義夫人に封ぜられ祭られるし、蔡瑞虹と朱源とのあいだの子は若くして科挙に及第し、母のために上疏して旌表を賜っている。このように話本は自殺した女性を、感傷的に悲劇のヒロインとみなすのではなく、貞節を貫いた烈女として讃えることによつて、読者に道德的解釈を促しているのだ。

そのことを、「蔡瑞虹忍辱報仇」を来源と比較することによつて考えていこう。

まず話本の内容を詳しく見ておく。賊の陳小四らに家族を皆殺しにされた蔡瑞虹は、別の舟の卜福に救われ結ばれるが、正妻の嫉妬にあい、妓楼に売られる。胡悦に落籍されるが落ちぶれて、瑞虹は美人局をさせられることになる。朱源がわなにかかるが、瑞虹は彼の人柄を慎重に試して信頼できると知ると、二人で逃げる。やがて二人の間には男子が生まれ、朱源は進士に及第する。その後亡き父が妾に生ませていた男子を見つけ、蔡家を継がせる。また賊の陳小四らも発見され、手下も含めて皆死刑となる。その知らせを受けた瑞虹は、仇を討つために恥を忍んで生きてきた

ことを遺言にしたため、自殺する。のち息子の朱懋が上疏して、旌表を賜る。

一方、来源の祝允明『野記』⁽¹⁴⁾では、女性主人公の娼は、王賊の手中にある。娼は隣の舟の朱生のことを詳しく聞き出す。ある夜、娼は朱生の舟へ行き、慎重に試したうえで、仇討ちの秘密を打ち明ける。翌朝迎えに来た王賊は、事が露頭したと知ると河へ飛び込む。そして結末は、「生遂に娼を持して家に帰る、娼卒に焉に老ゆ」⁽¹⁵⁾となつており、二人はめでたく結ばれるのである。

このように蔡瑞虹の自殺は話本の改作なのである。来源では、生と娼が結ばれて、円満な結末を迎えている。団円の結末が、なぜ話本では書き改められねばならなかったのだろうか。その答えは、蔡瑞虹の貞節を守るためであるはずだ。なぜならせっかく仇討ちを遂げても、何人もの男に汚された女が再び妾に落ち着くことは、一方は倫理にかなからである。彼女は自殺してこそ、道德的に完全な女性となるのである。

蔡瑞虹の心情は遺書の中で次のように雄弁に語られている。

隠忍して死せざるは、一人の廉耻は小さく、閨門の仇怨は大と以為えばなり。昔李將軍は詢を忍び虜に降り、當に以

て漢に報ゆべきを得んと欲す。妾は女流と雖も、志は竊に此に類す。……妾の仇は已に雪ぎて、志は已に遂げたり。節を失い生を貪れば、玷を閭閻に貽す。妾且に死に就き、以て蔡氏の宗に地下に謝せんとす。⁽¹⁶⁾

したがって話本の最後で、旌表されたところのも、彼女の死を表彰するきわめて当然な結果なのである。

来源の記事がハッピーエンドでありながら、道徳的には矛盾しているのを、話本はそのままに放置しなかった。団円を放棄し、蔡瑞虹を自殺させることによって、話本は道徳的一貫性を獲得した。そして同時にその道徳的一貫性によって、読者の秩序的読解の欲求もまた満たされるのである。その意味で、蔡瑞虹の死は、団円の破綻というよりは、新たな統一規範をもたらしより完全な結末というべきなのである。

「蔡瑞虹」をもともと仇討ちの作品と見るなら、全編が道徳的色彩を帯びることは当然かもしれない。では男女の愛情を主とする他の三編では、どのようなかたちで道徳的解釈が促されているのだろうか。

「杜十娘」「王嬌鸞」では、男性の裏切りによって女性はいくつ自殺する。そこでは背信の男性は悪役とされ、「杜十娘」の李甲は一生気が狂ってしまふし、「王嬌鸞」の周廷章は鞭打たれて死ぬというように、それぞれ報いを受けている。杜

十娘と王嬌鸞の貞節が述べられるだけでなく、男性への悪報が下ることによって、物語全体が因果応報の整合性に包まれることになる。

それに対して、「趙太祖」では女性の愛情を拒否するのが悪役ではなく、英雄趙匡胤であることが前の二編との最大のちがいである。そして趙匡胤は京娘の愛情を受け入れなかったからこそ、女性の色香に迷わなかったとして讃えられ、やがて皇帝になる。また京娘は家人に趙匡胤との関係を疑われたため、自分の純潔を示し、恩人趙匡胤にかけられた嫌疑を晴らすために、自縊する。語り手は、趙匡胤の徳と京娘の貞節とを両方讃えているのである。

「趙太祖」が道徳的一貫性によって成り立つ作品であることは、〈三言〉全体の構成からも見てとれる。〈三言〉は二話一類からなる構成をとっている。⁽¹⁷⁾したがって「趙太祖」は、「宋小官団円破氈笠」（『警世通言』二十二）と、何らかの点で対をなしているはずである。「宋小官」のあらすじは次のとおりである。

宋金が落ちぶれていたところ、劉有才の舟に拾われ、娘・宜春と結婚する。しかし宋金が肺病にかかったため、劉有才夫婦によっておきざりにされる。やがて宋金は金剛経を念じた功德によって病も癒え、大金持ちとなり、親の勧めにもかかわらず再婚しなかった宜春と再会し、再び結ばれる。

さて、歴史的英雄を扱い武俠物の色彩の濃い「趙太祖」と、仏教的で純粹な世話物の「宋小官」とは、一見対照的な作品である。しかも前者では京娘が自殺するのに対して、後者ではめでたく団円を迎えるのである。にもかかわらずこの二つが対にされるのは、京娘と宜春との貞節が共通するからではなからうか。京娘は貞節を守るために自殺したが、死後の表彰という昇華されたレベルで報われていた。同じく宜春も貞節を守って再婚しなかったおかげで夫と再会し、世俗レベルでの幸福という団円を迎えるのである。このようにこの二編は、道德的観点から対にされているのである。

団円に至らない四編の作品には、道德的解釈が施されており、読者はそれに従って整合的な読解に到達することができる。〈三言〉編纂の意図は道德的教化にあるとされる⁽¹⁸⁾が、それは馮夢龍の序文に示されるほかに、個々の作品が施す道德による統一的解釈、また対からなる配列からも理解できるであろう。

2・3 団円と道德性との関係

第一章で見た団円に至る作品群でも、実は「困難」解決の外枠の下で、登場人物の道德的完全性は常に追求されていた。そしてその道德性ゆえに困難が解決され、物語の安定的な外枠が保たれていたのである。例えば「范鯁児双鏡重

円」では、夫と離別した妻は、貞節を守るために自殺さえ計る。幸い父に見つけられて助かるが、決して改嫁することを肯んじない。こうした妻の貞節が、夫との再会を保証するのだ。このように女性の貞節が証明されることが、物語の団円を迎える重要な条件となっている。物語の結びがそのことをよく語っている。

後人が評論する。范鯁児は逆党のなかにあつて、朱に染まらず、好い行いをし、多くの人命を救った。今日死の中から⁽¹⁹⁾生き延び、夫婦再会できたのは、陰徳積善の報いなのである。

と、団円の結末に、道德的解釈を施している。

重要なのは、団円に至る作品では、登場人物の道德性と物語団円の結末とは円満な調和状態にあることである。正しい人物がそれにふさわしい幸せな結末を迎える。結末に道德的解釈が施されたとき、団円の物語はより一層安定したものとなるのである。

ところが上に挙げた四つの作品では、女性が貞節を守った結果、物語は団円を迎えることができなかった。つまり主人公の道德性と物語の団円は衝突して、後者が破棄されるのである。彼女らは正しい行為の結果、死を迎えざるをえないのである。自殺という行為の道德性が強調されればされるほど、彼女らの運命と道德との矛盾が意識されずに

はおれない。

2・4 読者の受け取り方

我々が問題にしている四編の作品は、明末には一般的だった団円の結末を迎えることがないかわりに、貞節という道徳的原理によって一貫した解釈が施されていることを述べてきた。次に、読者はこうした作品の語りかけをどのように受け取るかを考える。同じく団円に至らず悲劇的結末を迎える「趙貞女」「王魁」を、比較の対象として再び取り上げる。

「趙貞女」と「王魁」では、非業の死を遂げるのは不義の男性である。したがって悲劇の結末は当然であって、むしろ観客に喝采を催させる類いのものである。また「王魁」では死んだ女性自身が亡霊となって復讐して恨みを晴らすことによって満足を得ている。そのため「王魁」は悲劇とはいっても、作品は矛盾を解決して終わっている。

このような「悪有悪報」は〈三言〉の四作品の中にも現れる。杜十娘を自殺に追い込んだ李甲と商人は、それぞれ悪報を受けている。また王嬌鸞を裏切った周廷章は鞭で打たれて死ぬ。「悪有悪報」の結末は因果応報の原理に従った、合理的で読者も納得しやすい完結である。悪人が悲惨な結末を迎えるのは理の当然であって、そこには矛盾は存在しない。

ところが京娘や蔡瑞虹の物語は、何ら「悪有悪報」の要素はなく悲劇に至るのである。また杜十娘や王嬌鸞も、視点を不義の男性から貞淑な女性に移すなら、彼女たちは何ら道徳的欠点もなく、悲劇を迎えるのである。〈三言〉の作品群の女性たちは、「悪有悪報」によって死ぬのではない。逆に道徳的に完全であるがゆえに自殺せざるをえないのである。その不合理は作品中で決して解決されることはない。「悪有悪報」によって自分を裏切った男に罰が下されても、杜十娘や王嬌鸞の死の不合理が補完されたとは思われない。「王魁」の桂英が亡霊になって怨みを晴らすことによって補完を得るのとは異なるからだ。まして死後貞節を表彰される京娘や蔡瑞虹の場合は、ますます道徳と運命の矛盾が深められるとの思いが強い。このように〈三言〉の四作品においては、道徳原理の追求と主人公の死の結末の矛盾は、決して解決されることなく、その結果として読者に悲劇的感情を呼び起こさせるのである。

夏目漱石の『虞美人草』の末尾に次のような言葉がある。「悲劇は喜劇より偉大である。（中略）襟を正して道義の必要を今更の如く感ずるから偉大なのである。人生の第一義は道義にありとの命題を脳裏に樹立するが故に偉大なのである」²⁰。道義に背いた王魁の悲劇、「悪有悪報」の悲劇は、読者に道義の必要を思い起こさせる力を持っている。しか

し道義的に完全でありながら悲劇を迎える作品が読者に与える効果はより一層深刻だと言わねばならない。これらの作品は、アリストテレスの「悲劇とは、一定の長さで完結している崇高な行為の再現であり、(中略)同情と恐怖を惹き起こすところの経過を介して、この種の一聯の行為における苦難の浄化を果たそうとするところのものである」⁽²¹⁾という定義に合致する、真の悲劇と呼ぶにふさわしいものとなっているのである。

第三章 解放された読みの可能性

物語を団円へと方向づけし、あるいは道徳的解釈を施していた語り手は、読者の読みに相当の制約を課していると言わねばなるまい。例の四編が真の悲劇的感情を読者に与えたのは、団円の期待という読者の内的条件と、語り手の促す道徳的一貫性とが齟齬したからであった。つまり語り手の促しによって引き起こされた特殊な反応だったのである。また最初に紹介した「蔡瑞虹忍辱報仇」を「封建礼教のために讃歌を奏でた」とする現代の批評は、語り手の道徳的解釈をうのみにした、あまりにも従順な、言わば語り手に騙された読みだといえる。

では我々はどこまでも話本の語りの中でしか、物語を受け取ることができないのであろうか。話本の語り手はそれ

ほどまでに完全に、物語を、また読者を掌握しきっているのだろうか。先の四編の受容においては、団円と道徳の対立を契機に、語り手の促しから解放された読解に立ち至ったのであった。我々には、話本の語りの齟齬をきっかけに、語り手の解釈から解放された新たな読みを獲得する自由が残されているはずである。

3・1 「趙太祖千里送京娘」の場合

再び「趙太祖」を見てみよう。語り手が最後に道徳的解釈を施していたことは、すでに述べたとおりである。しかし語り手は道徳的立場からのみこの物語を語るのではなく、むしろ大いに京娘に同情しているのである。京娘が旅の途中で愛を告白するかどうか思い悩む場面を見てみよう。ここでは語り手が完全に京娘の心理を代弁している。

自分から告げようとするが、口にするのが恥ずかしくて言えない。彼は一本気の好漢、どうして私の真心をわかってくれよう。あれこれ考えて、一晚中眠れない。……京娘は口には出さず、心で思った。もうすぐ家に着くが、恥ずかしがってばかりで言わずに、この機会を失ったら、家に着いた時にはもう終わりで、後悔しても間に合わない。日が暮れるとあたりは音もなく、微かなともしびが明滅し、京娘はなかなか眠れず、灯の前で溜め息をつき涙を流して

た。⁽²²⁾

それに対して趙匡胤の拒絶は語り手から語られることがない。あくまで趙匡胤自身のセリフとして趙太祖自身の口から語られるのである。

私があなたと偶然出会い、身を投じて救い出したのは、側隠の心からであって美貌を貪るためではない。いわんや姓が同じでは結婚できないし、兄妹と呼びあって乱れたことはできない。私は女性を抱いても乱れなかった柳下惠のようであるのに、あなたは欲をほしいままにして礼をそこなつた呉孟子のまねをしてはいけ⁽²³⁾ない。

趙匡胤は京娘の感情を無視して、もっぱら道徳的な言葉を連ねる。その結果、すでに京娘の側に感情移入している読者は、趙匡胤の言動を京娘への愛情の拒絶と受け取ることになる。京娘の悩んだ末の告白と、趙匡胤の冷徹な返答とは、鋭い対照をなしており、京娘の心情を読者に訴えようとする語り手の意図は、大いに成功している。

ところが京娘の死後、語り手は趙匡胤が宋の太祖になったことを述べ、その太祖によって京娘が貞義夫人に封ぜられ、祭られたと語る。ここで語り手は趙匡胤の側に立場をすっかり変え、物語を道徳的に解釈しようとしている。しめくくりの詩は「私情を恋わず強きを畏れず、独り千里を行き京娘を送る。漢唐の呂（后）武（則天）紛として多事、誰か及ばん英雄趙太祖」と、もはや京娘の悲劇は忘れ去ら

れ、趙匡胤の賛美に終始している。この物語を愛情悲劇と見る見方は微塵もなく、英雄趙太祖の崇高な行爲という秩序的解釈が示されるだけである。このように物語は京娘の愛情が拒絶される過程として進められるにもかかわらず、趙匡胤のセリフでは道徳的秩序が語られ、最後に語り手は物語全体を英雄の美談として閉じるのである。ここに至って、読者は語り手と趙匡胤とが、言わば共犯して、京娘の死を貞節という道徳によって隠蔽しようとしていることに気付かされる。語り手は一旦京娘に同情し、京娘の心理を代弁する役をつとめながら、最後に道徳的論理によって物語を閉じようとしたために、かえって自らの語りを裏切り、京娘の運命と道徳性の矛盾を読者に露呈してしまうのである。

3・2 「杜十娘怒沈百宝箱」の場合

趙匡胤の拒絶を道徳によって正当化したのと異なり、「杜十娘」においては裏切った李甲は罰を受けており、語り手の杜十娘に対する一貫した共感に矛盾はない。

しかし杜十娘が百宝箱とともに身を投げる直前に李甲に語るセリフに注意しよう。

私は色街に数年、密かに貯めたお金は一生の計のため……都を出る時に、姉妹たちから贈られたふりをして、箱の中に隠していた宝物は、万金を下らない。……今日皆さんの

目の前で、箱を開けてお見せし、あなたにたかが千金ぐらい何でもないということを知らせたのだ。私の箱の中には玉があるが、あなたの目には珠がないことを恨む²⁴。

杜十娘は死に臨んで初めてそれまで李甲に隠していた百宝箱を開けて皆に見せる。それは李甲があれほど苦勞しても集めることができなかった、杜十娘落籍に十分な金額だったのである。

百宝箱をめぐつては、話本の語りは非常にぎこちない。妓女仲間からお別れにその箱をもらうとき、語り手は、

従者に金箔の手箱を持って来させたが、かたく鍵がしてあり、中に何が入っているかわからない。十娘は開けて見もせず、辞退もせず、ただ丁寧にお礼を言っただけだった⁽²⁵⁾。

と、きわめて暗示的である。語り手はその箱がもとと杜十娘自身の物であることを知りながら、読者には隠しているのだ。次に百宝箱が出てくるのは、旅の途中で船賃がなくて困る場面である。

(杜十娘は) 鍵を取って箱を開けた。公子(李甲)は傍らで恥ずかしく思い、また箱の中が空っぽかどうか怖くて見ることができない。……十娘はもとどおりに箱に鍵をしたが、箱の中に何があるかは言わなかった⁽²⁶⁾。

ここでも箱の中身を李甲に隠している。最後に、孫富に売られることの決まった杜十娘は、百宝箱を一旦孫富の舟に

移すが、もう一度取り戻して、宝物を川に投げ始めるのである。そしてその宝物は自分がこれまで稼いだものと李甲に初めて告げて、百宝箱とともに身を投げるのである。

このように百宝箱に関しては、杜十娘と語り手が秘密を共有して、李甲を欺いているのである。逆に李甲は自分の父親に対する恐れを正直に杜十娘に打ち明けている。妓女にとっては金が唯一の頼りであろう。しかし杜十娘が李甲に自分の宝物を示すことができず、彼をたびたび試さねばならなかったのは、李甲の愛情に頼りきることができなかったことを意味する。一方納粟入監によって太学生になった李甲にとっても、唯一の頼みは父親の財産である。その父親に妓女との仲を知られることをひどく恐れていることは語り手が再三述べているが、李甲自身もまたそのことを直接杜十娘に打ち明けているのだ。李甲の方が自分の弱みを率直に告白しているのである。

語り手は、杜十娘の李甲に対する愛情に読者が疑いをさしはさまないように、百宝箱の由来については口を閉ざしていた。逆に李甲がいかに父親を気にする小心者かということ的印象づけるために、このことは五回も積極的に語られる。こうした語りの執着に目を向ければ、語り手は愛情を信じるのでできない妓女の悲哀を百宝箱に象徴させ、

また若き書生の父親に対するエディプス・コンプレックスを強調している、ときえ言えるであろう。百宝箱と父親への恐れをめぐる語りの作爲的隠蔽に気付いた時、善玉杜十娘が悪玉李甲に裏切られて自殺するという、安定した図式的理解は自ら崩れ去るのである。⁽²⁷⁾

結語

文学作品は様々な約束事の上に成立している。通俗文学も例外ではない。むしろ通俗であるがゆえに、かえって気付かない約束事により多く縛られているのではないか。話本の語り手が促し、読者が期待した、物語の団円および道徳性とは、話本の成立に不可欠な約束にはかならない。大多数の作品では、道徳的に正しい人物が団円の結末を迎えるというかたちで、この約束は忠実に守られている。

本稿で四編の自殺する女性を描いた作品を考察したことは、約束事に基づいた安定した読解が崩壊していく過程をたどることであった。つまり語り手と読者が共通して安定した読解を望むにもかかわらず、団円と道徳とが矛盾することによって、語り手は自ら齟齬を露呈し、読者の期待は満たされることがなかった。まさに語り手の語りと読者の期待をめぐる緊張した受容の過程において、悲劇的感情が生じたのである。

では語り手は自分の語りに齟齬をきたしたために、作品を語ることに失敗したかという、決してそうではない。全知全能と思われていた語り手に齟齬を見出したとき、我々は従順な読者であることをやめる。そして語り手が糊塗しえなかった作品中の齟齬に分け入り、読者自身による新たな読みの可能性を探るだろう。そのとき話本は語り手から解放された次元において、新たな意味を生成しはじめるのである。

注

(1) 繆詠禾『中国古典文学基本知識叢書 馮夢龍和三言』（上海古籍出版社、一九七九）三一、四九頁

(2) 白話小説を「語り手」という観点から分析したものに、鈴木陽一『儒林外史』の文体について（『中国語学』二二四、一九七七）がある。

(3) <三言>のテキストは、次に示すゆまに書房影印本を底本とし、人民文学出版社の校注排印本を参照した。

○『全像古今小説』（ゆまに書房、一九八五、拠内閣文庫蔵天許齋藏板本影印）

○『警世通言』（ゆまに書房、一九八五、拠蓬左文庫蔵金陵兼善堂本影印）

○『醒世恒言』（ゆまに書房、一九八五、拠内閣文庫蔵金閨葉敬池梓本影印）

○許政揚校注『古今小説』（人民文学出版社、一九五八初版）
○嚴敦易校注『警世通言』（人民文学出版社、一九五六初版）

- 顧学頤校注『醒世恒言』（人民文学出版社、一九五六初版）
- (4) 陶宗儀輯・陶珏重校『說郛一百二十』(東北大学蔵清順治三年宛委山堂刊本)に拠る。なお話本の来源については、譚正璧編『三言兩拍資料』(上海古籍出版社、一九八〇)、小川陽一『三言一拍本事論考集成』(新典社、一九八一)を参照。
- (5) 『中国古典戯曲論著集成 三』(中国戯劇出版社、一九五九)所収に拠る。
- (6) 『南戯始於宋光宗朝、永嘉人所作趙貞女・王魁二種實首之。』(二九頁)
- (7) 『趙貞女蔡二郎』(注)即舊伯喈棄親背婦、爲暴雷震死。里俗妄作也。實爲戯文之首。『王魁負桂英』(注)王魁名俊民、以狀元及第。亦里俗妄作也。周密齊東野語辨之甚詳。(二五〇頁)
- (8) 曾慥編『類說』(文学古籍刊行社、一九五五、挾明天啓六年刊本影印)に拠る。なお『王魁』については、伝田章『桂英死報——王魁說話——』(『中国文学の女性像』汲古書院、一九八二)参照。
- (9) 錢南揚輯録『宋元戯文輯佚』(上海古典文学出版社、一九五六)、傅惜華『明代雜劇全目』(作家出版社、一九五八)、莊一拂編著『古典戯曲存目彙考』(上海古籍出版社、一九八二)、邵曾祺編著『元明北雜劇総目考略』(中洲古籍出版社、一九八五)を参照した。
- (10) 『桂英重生與魁偕老。則作者不得不然也。此等事後來頗多。』黃文暘『曲海総目提要』(人民文学出版社、一九五九)六四七頁。
- (11) 王国維『王觀堂先生全集』(文華出版公司、一九六八)冊十四、六一二頁。
- (12) それぞれの来源は次のとおり。『杜十娘』は明・宋幼清『九篇別集』卷四「負情儂伝」。「王嬌鸞」は明・馮夢龍『情史』卷十六「王廷章」。「趙太祖」については『曲海総目提要』卷二十七「風雲会」では、元・彭伯成の雜劇「京娘怨」(『録鬼簿』卷上著録)との關係を推定しているが、散逸しており不詳。「蔡端虹」は明・祝允明『九朝野記』卷四。「趙太祖」以外はすべて明代の故事である。
- (13) しかし団円の欲求は根強く、例えば「杜十娘」はのち李甲と龍王府で結ばれるという結末に改変される。阿英『関于杜十娘沈箱故事』(『小説二談』古典文学出版社、一九五八)参照。
- (14) 李拭輯『歷代小史』(東北大学蔵明刊本)卷七十九所収に拠る。
- (15) 『生遂持娼歸家、娼卒老焉。』(卷七十九 六十五葉a面)
- (16) 『隱忍不死者、以爲一人之廉耻小、閨門之仇怨大。昔李將軍忍詢降虜、欲得當以報漢。姜雖女流、志竊類此。……姜之仇已雪而志已遂矣。失節貪生、貽玷閨閣。姜且就死、以謝蔡氏之宗于地下。』(卷三十六、三十五葉a、b面)
- (17) 福満正博『古今小説』の編纂方法——その対偶構成について——(『中国文学論集』十、一九八一)参照。
- (18) 大木康『馮夢龍「三言」の編纂意図について——特に勸善懲惡の意義をめぐる——』(『東方学』六十九、一九八五)参照。
- (19) 『後人評論、范蠡兒在逆黨中、涅而不淄、好行方便、救了許多人性命。今日死裡逃生、夫妻再合、乃陰德積善之報也。』(卷十二、十三葉a面)
- (20) 『夏目漱石全集 第三卷』(岩波書店、一九六六)四二八、四二九頁。
- (21) 今道友信訳『アリストテレス全集 十七』(岩波書店、一九七二)「詩学」一四三、一四八頁。

(22) 「欲要自薦、又羞開口、欲待不説、他直性漢子那知奴家一片真心、左思右想、一夜不睡。……京娘口中不語、心下躊躇、如今將次到家了、只管害羞不説、挫此機會、一到家中、此事便索罷休、悔之何及。黃昏以後、四字無聲、微燈明滅、京娘兀自未睡、在燈前長嘆流淚。」（卷二十一、二十葉 a } b 面）

(23) 「俺與你萍水相逢、出身相救、實出惻隱之心、非貪美麗之容。況彼此同姓、難以爲婚、兄妹相稱、豈可及亂。俺是個坐懷不亂的柳下惠、你豈可學縱欲敗禮的吳孟子。」（卷二十一、二十一葉 a } b 面）

(24) 「妾風塵數年、私有所積、本爲終身之計。……前出都之際、假托衆姊妹相贈、箱中韞藏百寶、不下萬金。……今日當衆目之前、開箱出視、使郎君知區區千金未爲難事。妾懷中有玉、恨郎眼內無珠。」（卷三十一、二十葉 b 面 } 二十一葉 a 面）

(25) 「命從人掣、描金文具至前、封鎖甚固、正不知什麼東西在裏面。十娘也不開看、也不推辭、但殷勤作謝而已。」（卷三十一、十一葉 b 面）

(26) 「乃取鑰開箱、公子在傍自覺慚愧、也不敢窺觀箱中虛實。……十娘仍將箱子下鎖、亦不言箱中更有何物。」（卷三十一、十二葉 a } b 面）

(27) 百宝箱への疑念はすむに、Hanan, Patrick. "The Making of *The Pearl-sewn Shirt and The Courtesan's Jewel Box*," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 33, 1973, pp. 148, 152.

また同論文の中国語訳、王秋桂編『韓南(Hanan)中国古典小説論集』（聯経出版事業公司、一九七九）二〇・二五頁、および趙齊平・馬晚光「文理自然 姿態橫生——談『杜十娘怒沈百宝箱』的情節・結構」（『古代白話短篇小説鑑賞集』人民文学出版社、一九八六）が指摘している。しかし後者が「彼女の深

謀遠慮」（一五一頁）と言うように、いずれも杜十娘の慎重な配慮の現れという方向で理解している。語りの齟齬を補って、首尾一貫した読解を目指す例である。